

カザフスタンのアルマトイ市の第八次・第九次五カ 年計画におけるソビエト政権下の都市計画・建築様 式の概要：（ブレジネフ政権時代のソビエト・カザ フスタンの一般建築史その1）

諸喜田, 真
フリーランス

<https://doi.org/10.15017/7390845>

出版情報：都市・建築学研究. 48, pp.43-58, 2025-07-15. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University
バージョン：
権利関係：



カザフスタンのアルマトイ市の第八次・第九次五カ年計画におけるソビエト政権下の都市計画・建築様式の概要
(ブレジネフ政権時代のソビエト・カザフスタンの一般建築史 その1)
Overview on urban planning and architectural styles under the Soviet regime in the Eighth and Ninth Five-Year Plan in Almaty, Kazakhstan
(General Architectural History of Soviet Kazakhstan during the Brezhnev Regime Part 1)

諸喜田 真*
Shin Shokita

In the 1960s, the ideology of the Communist Party was strengthened due to the conflict with America, Mexican and Japanese architecture that combined modernity and tradition was praised, especially Kenzo Tange's Kagawa Prefectural Office building. During the Eighth Five-Year Plan, the installation of mosaic panels, brise-soleil and louvers, which took regional characteristics into account, and the introduction of Japanese architecture and traditional gardens were implemented. During the Ninth Five-Year Plan, through the introduction of regional way, Japanese architecture and foreign architecture, Lenin's doctrine of "two cultures" proposed by Yu. Yaralov in 1965 in "National and International in Architecture" was formed superficially in that way.

Keywords : Soviet architecture, Urban design, Kazakhstan, Almaty, Soviet modernism, Brezhnev, Kenzo Tange
ソビエト建築, 都市計画, カザフスタン, アルマトイ, ソビエトモダニズム, ブレジネフ, 丹下健三

1. はじめに

1.1 研究の背景

ブレジネフ時代の1965年から1975年までの第八次・第九次五カ年計画のカザフスタンのアルマトイの建築に関する論文・書籍は2024年の諸喜田真の論文1.1項で言及されたもの^{文献1)}を除いて、エリザベータ・マリノフスカヤの「Памятник архитектуры советского модернизма: дворец им. В.И. Ленина (Алматы) (ソビエトモダニズムの建築記念碑: V.I.レーニンにちなんで名付けられた宮殿(アルマトイ))」(2017年)があるが、アルマトイのレーニン宮殿に関するもので、本稿で後述するYu.ヤラロフの分析を若干展開させた内容であり、「現代建築の国際的な基本原則とより有機的に重なっていた(筆者訳)」^{文献2)}としたが、外国の建築とどのように関わっていたのか全く記述されていない。

また1979年の建築雑誌上で当時アルマ・アタの主任建築家であったA.K.カパノフは「ソ連やメキシコ, 日本な

どの外国の現代建築において伝統的な建築方法や建築芸術の解釈の経験も研究した」^{文献3)}と述べた。筆者は2017年に当時78歳のカザフスタンの建築家アルマス・オルダバエフにアルマトイにてインタビューを行ったが、オルダバエフは丹下健三から大きな影響を受けたとし、最も尊敬する建築家に丹下を挙げた^{注1)}。これらの事からアルマトイの当時のソ連時代の建築において外国の影響が大きかったのではないかと考えられる。

1.2 研究の目的と方法

アルマトイにおけるブレジネフ政権時代の第八次・第九次五カ年計画における建築において建築様式・形態の傾向は、サモイロフの論文により、新地域主義のテーマや装飾的な格子、テーマ性を伴った装飾レリーフ、ファサードの可塑性などとされ^{文献4)}、統計による分析結果であるが、政策や建築界の状況によりどのようにそれらが形成されていったのか、当時のソ連の建築界の動向が分析されていないため明らかにする必要がある。また前述のカパノフによる発言でカザフスタンの建築界においてソ連や外国の建築の研究が行われたとしたが、中央の建

* フリーランス

築界の状況に基づいてどのように日本や外国の建築が受容されていったのかも明らかにされておらず、外国の建築界の情報がソ連の建築界でどのように発信され、建築に反映されていったのかを考察する必要がある。その方法としてこれまで出版されてきた書籍・雑誌などの二次資料をレビューし、ソ連の第八次・第九次五カ年計画において共産党による政策・決議や当時の中央の建築家の発言や言説・論考を時代順に記述していき、それに基づいてアルマ・アタの都市計画・建築様式がどのように形成されていったのか本稿にて明らかにしていく。

2. 第八次五カ年計画（1966-1970）前後の政治・建築界の状況

1962年10月キューバ危機が起こりアメリカとの関係が一気に冷え込んでいったが、同年12月にフルシチョフが抽象芸術を批判したことから^{文献5)}、1963年6月ソ連共産党中央委員会（以後 CPSU 中央委員会）の総会がモスクワで開かれ、「党のイデオロギー活動の当面の課題」についての議論が行われ、アメリカを含む帝国主義への対決姿勢とマルクス・レーニン主義に基づく党のイデオロギー強化を鮮明にしていた^{文献6)}。

1962年11月に行われた CPSU 中央委員会の総会で、フルシチョフは「品質を向上させ建設コストを削減するには設計組織の運営の不統一を解消し、技術レベルを高める必要がある（筆者訳）」^{文献7)}と述べ、1963年8月ソ連閣僚理事会で「土木工学、計画および都市開発の分野における設計作業の改善について」が決議され、住宅、教育、医療と健康、貿易と公共のケータリング、娯楽施設、スポーツ施設といった主要な建築物の標準設計と実験設計を行うための五つの中央研究設計機関が創設された^{文献8)}。またこの総会の決定を受けて1963年3月全ソ連建築家連合理事会第3回総会がモスクワで開催され、3月に先立って行われた文学者や芸術家らと党・政府指導者との会合で、フルシチョフによる「芸術はイデオロギーの領域に属するとして抽象主義・形式主義を批判」を取り上げ、ブルジョワ・イデオロギーとは異なる社会主義リアリズムの法則に基づき、レーニン主義に従った記念碑芸術の必要性が主張された^{文献9)}。

建築学博士のハーン・マゴメドフによる論考「西洋の現代建築における保守的な傾向」が「ソ連の建築」1963年第7号に掲載され、「ミース・ファン・デル・ローエは機能主義を発展させ米国建築における公式の方向性となった。（中略）1950年代に米国だけでなく他の資本主義諸国にも急速に広がった。（中略）『ミース学派』は西洋建築を新たな危機に導き、アメリカ建築のコスモポリタニズムに対する他国の多くの建築家の抗議とアメリカ国内のかつてのミースの信奉者たちから反発を招き、（中略）現代アメリカの新古典主義はミース自身の創作

信条から発生したもので、（中略）多くの国でミース派『スタイル』のオフィスビルに代表される米国の国際的な建築に対する闘争が伝統的な建築の形式や技法の復活をもたらした（筆者訳）」^{文献10)}とし、「ソ連の建築家の創造性の再構築において（中略）外国の経験の分析、資本主義諸国の建築における形式主義的傾向の批判は現代ソビエト建築における形式の統一の問題に正しくアプローチするのに役立つ（筆者訳）」^{文献11)}と主張し、ミース的な形式主義への批判とその分析の必要性が謳われた。

「ソ連の建築」1963年第8号に全ソ連建築家連合理事会書記の G.シェミヤキンによる「ソ連建築家連合のイデオロギー活動の任務」という論考が投稿され、前述の「党のイデオロギー活動の当面の課題」の決定は非常に重要で、ブルジョア・イデオロギーとの戦いにおける資本主義建築の経験を批判的に分析することの重要性^{文献12)}、外国の現代建築における抽象主義への批判^{文献13)}、ガラス建築の暑い気候性への無視に対する批判^{文献14)}、資本主義国家の建築におけるマルクス主義的観点からの分析の必要性^{文献15)}などイデオロギー強化が強く謳われた。

1964年10月にブレジネフがソ連共産党第一書記に就任したが、官僚主義と政治的統制が強化されフルシチョフ時代の雪解けによる開放性はひそめていった^{文献16)}。

Yu.ヤラロフは1965年に「建築における民族と国際」という論考を自身が編集長を務める雑誌に投稿し、ソ連全土で建設された大型パネルの集合住宅や標準設計による公共建築に対し「何の特徴もなく、レーニンの教義『二つの文化』は芸術・建築における民俗の特性と国際的な傾向への形成の問題を解決する基礎であり、新たな条件のもと異なった方向性と特性を与えなくてはならない

（筆者訳）」^{文献17)}と主張した。ヤラロフは外国での例を挙げ、メキシコ大学のフレスコ画やバスレリーフ、「日本ほど伝統に（実践だけでなく理論的にも）配慮している国はないだろう（筆者訳）」として池辺陽の発言や伝統的なモジュール化を取り上げ、伝統と現代を統合させた日本建築を称賛し、その日本建築の代表として丹下健三の香川県庁舎を挙げ、丹下健三をこの10年間のその実践と理論的な仕事において最も著名な建築家の一人とした^{文献18)}。また同号では、ソ連建設建築アカデミー会員の N.ビリンキンが1962年に訪日し、京都での伝統建築や庭園に対する感想、西洋美術館と東京文化会館を絶賛し、前川國男の事務所を訪れコンペの重要性を前川から伺い、そして丹下健三とも会い旧東京都庁舎を見学したことなどが掲載された^{文献19)}。

1956年から1966年にかけてソ連で「美術史一般」が全7巻刊行されたが、1965年に第6巻「20世紀の芸術」が出版され、20世紀以降の美術と建築に対する概説が行われた。その中で言及された戦後の建築を挙げるとフランスからはル・コルビュジエや共産党員であったアンド

レ・リュルサの建築、ユネスコ事務局^{文献20)}、イギリスからは戦後の住宅地計画等^{文献21)}、スイスからはローランド・ライナーのウィーン市庁舎^{文献22)}、西ドイツからはハンス・シャロウンの有機建築等^{文献23)}、イタリアからはローマのテルミニ駅やEURにイタリア文明宮殿、ネルヴィやジオ・ポンティの建築^{文献24)}、スウェーデンからはストックホルム近郊のベリングビーの衛星都市、グレンダールのY字型集合住宅^{文献25)}、アメリカからはミノル・ヤマサキのレイノルズ・メタル本社ビルやエーロ・サーリネンの空港、ライトのグッゲンハイム美術館^{文献26)}、ラテンアメリカの建築からはブラジルにおけるO.ニーマイヤーの建築を「有機的」と評価しブラジルが紹介され、メキシコからはフェリックス・キャンデラやメキシコ大学^{文献27)}等の建築や都市計画が肯定的に紹介された。科学アカデミー美術史研究所副所長O.シュヴィドコフスキーとハーン・マゴメドフによる「資本主義国家の建築」の項で20世紀の外国の建築の歴史が記述されたが、「グロピウス、ル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエ、アアルト、ニーマイヤー、ライト、丹下、メンデルスゾーンなどの近代建築の巨匠は（中略）進歩的傾向と反動的傾向、革新的探求と保守主義が共存し闘争している。つまり彼らの作品は資本主義国の建築に特徴的な矛盾を反映している（筆者訳）」^{文献28)}とし、「ミースとその学派の技術主義に対する明確な反応は、戦後の様々な地域的傾向の出現と、ライトの実体験と理論的見解に基づくいわゆる『有機建築』の普及であった。（中略）多くの建築家の作品は両派の一面性を克服し、機能主義の成果と『有機建築』の肯定的な側面を組み合わせたいという願望を示し、それにより彼らの建築実践には貴重なものが多く含まれており北欧諸国で大きく発展した（フィンランドの建築家A.アアルトなどの作品）。（筆者訳）」^{文献29)}とし、「国家的アイデンティティは過去の建築形式の復活ではなく、建築の独自性、技術的、気候的、社会的、生活条件、国家的特徴を考慮することに基づいている（筆者訳）」^{文献30)}と分析が行われた。

また同書において各国の芸術と建築が紹介されたが、N.ニコラエワによる「日本の芸術」の項において、「国家芸術の伝統とその現代における重要性の問題はすでに50年代初頭から深刻であり、日本文化への関心が世界中で高まっている。その後建築や応用芸術における日本の影響がほぼ全ての国で認識されてきた（筆者訳）」^{文献31)}とし、丹下や前川國男の建築と伝統的な庭園に対し「古い日本建築の特徴であった建築と自然の融合は日本だけでなく世界の多くの国で現代建築において新たな解釈を受けてきた（筆者訳）」^{文献32)}として前川の東京文化会館を取り挙げ、「力強い形態の造形力、光と影のコントラスト、日本の古い寺院のシルエットを想起させ、空白の塔壁と曲線を描く屋根のラインの並置によって表現力豊

かで建物の周囲の空間はコンクリートによる彫刻作品と装飾的な池によって組織されている。建物内部は色彩豊かで豊富な絵画や彫刻、レリーフ、モザイクが特徴的で新しい建築形式と絵画、彫刻、装飾芸術や応用芸術が統合された（筆者訳）」と高く評価した^{文献33)}。

1965年10月第4回全ソ連建築家連合会議がモスクワのクレムリン宮殿で開催され^{文献34)}、集合住宅と文化建設の質の向上のため標準設計の形式と方法の改善^{文献35)}、都市の再建における建築記念碑の保存・開発の必要性^{文献36)}、建築家の創造的な活動と専門レベルを向上させる重要な要素として建築コンペの重要性^{文献37)}、社会主義リアリズムの原則の必要性や資本主義諸国における現代建築の経験を批判的に評価し、その最良の成果だけを創造的に習得する必要性^{文献38)}等が議論された。

1966年3月から4月にかけてモスクワでCPSU中央委員会第23回会議が開催され、社会主義競争の更なる発展、共産主義労働者の運動、共産主義建設の新たな達成、世界社会主義の力の強化に対するソビエトの価値ある貢献、及び国際革命運動の勝利ある発展のため、偉大なる十月の社会主義革命50周年（1967年）とレーニン生誕100周年（1970年）を記念するよう呼びかけられた^{文献39)}。

これを受けソ連建築家連合理事会第一書記のG.オルロフは「イデオロギー的に偉大な意味を持つ任務」という論考を「ソ連の建築」1966年第4号に寄稿し、「芸術的な品質が減少した結果、都市の個性は形成されず建築の具象的な表現は失われた。（中略）建設の質の大幅な向上と建設文化の増大を達成しなければソビエト建築のさらなる隆盛は保証されない。（中略）レーニンの思想を実現する上での建築の役割と任務は重要で、十月大革命50周年とレーニン生誕100周年の準備に関連して芸術の総合問題と記念碑的プロパガンダの問題が特に重要である。建築家と芸術家、記念碑作家と彫刻家の間で実践的な共同創造活動を確立することが特に重要である（筆者訳）」^{文献40)}と強く主張が行われた。

3. 第八次五カ年計画時（1966-1970）におけるアルマ・アタの都市計画と建設

1965年、アルマ・アタの副主任建築家キム・ドセンは建築家の仕事の指針となる創造的な原則を定式化し「1. ポリマー材料を乱用しない事。建築の単純さと『真剣さ』が失われてしまう。2. 光、影、空気、水などの自然の要素なしでは建築は有機的になりえない。3. 高品質の建設、設置、仕上げ作業の配慮なしに今日の美的要求を満たし真に美しい構造物を作成することは不可能。4. 建築において鉄筋コンクリートを構造材料としてだけでなく造形的な材料としても『機能』させる。彫刻家や壁画家の参加なしには調和のとれた建築は成立せず、建築作品は人々の美的センスを育むものでなければならない。（中

略) 社会的に重要な大規模建築物は固定観念を避けるために、それぞれに個性を持たせる必要がある(筆者訳)」と建築雑誌上で主張した^{文献41)}。



(写真1) レストラン「アルマ・アタ」, 1966年^{出典1)}



(写真2) レストラン内観, 1966年^{出典2)}

1959年の第21回 CPSU 大会において、「ケータリングが社会の物質的な節約と労働力を提供するだけでなく、家族の生活を根本的に変え、女性を家庭の苦難から解放する(筆者訳)」^{文献42)}ため、「公共ケータリングのさらなる発展と改善について」が決議され、1966年に新たにレストラン「アルマ・アタ」(写真1)がO.ショリン, A.ペトロフ, A.ペトロワの設計で共産主義通り沿いに建設された。極めて機能主義的なモダニズム様式で内部にモザイク画(写真2)が施された。

1967年にホテル「アルマ・アタ」(写真3)がカリーニンーパンフィロフ通りの交差点にI.カルタシ, V.チルキン, A.コソフ, N.リピンスキーの設計によって建設された。市の中心地にて初めて現場打ちコンクリートが低層部2階部分まで適用されたが^{文献43)}、それ以上の階には十字型のプレキャスト鉄筋コンクリートが適用された^{文献44)}。敷地に沿って弓状に配置され、南東部分のファサードにはバルコニーが水平上に連続して設けられ、1階エントランスの横には民族伝承をテーマにしたモザイクパネル(写真4)が設置された^{文献45)}。

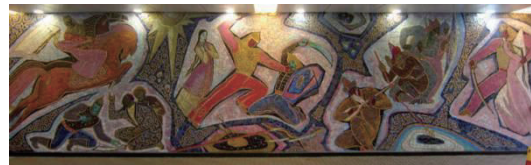
1967年に十月革命50周年記念スポーツ宮殿(写真5)がアバイーコスモナフト通りの交差点にV.カーツェフ, O.ナウモフの設計によって建設された。

前述の第23回 CPSU 会議において「バス輸送を約1.9倍増やし、公園に近代的なバスを補充しガレージと公共サービスステーションの建設の拡大(筆者訳)」が決議され^{文献46)}、1969年にバスターミナル・サヤハット(写真7)が十月革命50周年記念通りにV.バベンコ, A.スミル

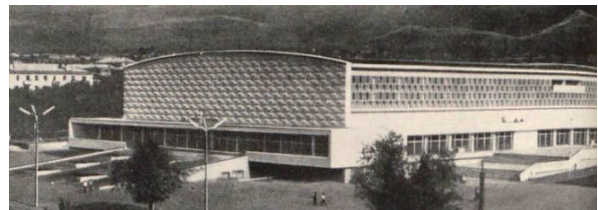
ノフの設計によって建設された。



(写真3) ホテル「アルマ・アタ」, 1967年^{出典3)}



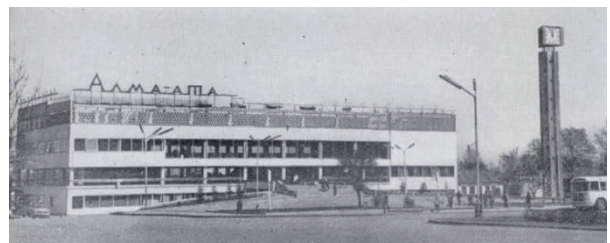
(写真4) ホテル「アルマ・アタ」モザイク(筆者撮影)



(写真5) スポーツ宮殿, 1967年^{出典4)}



(写真6) スポーツ宮殿, 1967年^{出典5)}



(写真7) バスターミナル・サヤハット, 1969年^{出典6)}

1968年に映画館アルマン(写真8)がレーニン通り沿いにA.コルジェンボ, I.スロノフの設計によって建設された。ソリッドな白のボリュームで構成された極めて禁欲的な外観であるが、芝生を貼った中庭(写真9)が設けられ、ガラスのカーテンウォールを通じて自然光が内

部に降り注ぎ、地域性が表現された建築であった^{文献47)}。外壁には十月革命 50 周年を祝うための宇宙飛行士や科学者、軍隊、太陽に向かうイカルスなどを模したレリーフが彫刻家 V.コンスタンチノフによって外壁に施され^{文献48)}、影が落ちるよう外壁に突起物が取り付けられており南部特有の光が表現された。

これらの建築は偉大な十月の社会主義革命 50 周年を記念して建設された^{文献49)}。



(写真 8) 映画館アルマン, 1968 年^{出典7)}



(写真 9) 映画館アルマン中庭, 1968 年^{出典8)}

1968 年に共産主義通り沿いに共産党地域執行委員会の管理棟 (写真 10) が A.ナウモフ、V.ミヘーフの設計によって建設された。11 階建ての高層棟はアルマ・アタにおいて鉄骨造による^{文献50)}初の高層建築であった^{文献51)}。



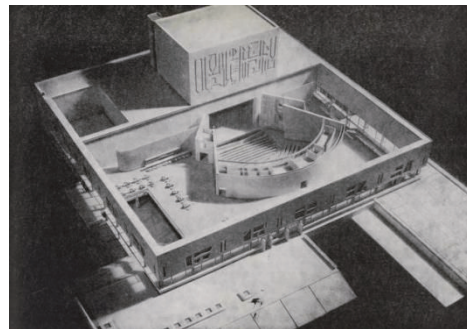
(写真 10) 管理棟, 1968 年^{出典9)}

1961 年の第 22 回 CPSU 会議の「図書館、講義室、読書室、劇場、文化センター、クラブ、映画館のネットワークの増加 (筆者記)」^{文献52)}の決定を受けて 1964 年から 69 年にかけてレルモントフ・ロシアドラマ劇場 (写真

11) がモスクワの娯楽・スポーツ施設中央研究所の V.ダヴィデンコ等^{文献53)}の設計によって共産主義通りとアバイ通りの交差点に建設された。



(写真 11) ロシアドラマ劇場, 1969 年^{出典10)}



(写真 12) ロシアドラマ劇場初期案模型, 1966 年^{出典11)}

1966 年にモスクワの建築家中央会館にて新しい劇場に関する公開討論が行われ、劇場の標準設計は不適切で各劇場には独自の顔があるべき、どの劇場も街の誇りであり建築のハイライトであるべきという意見や、劇場建築には民族的特徴を保持し伝統的な材料を使用することが必要という意見も出され^{文献54)}、会議の参加者の多くは劇場の建物の主要な要素のみを標準化する必要があり、全てを制限する必要はない^{文献55)}という意見がなされた。ソ連国内においては大祖国戦争後 1964 年まではモスクワの劇場専門の設計機関ギプロテアトルによって開発された VSN-43 と呼ばれる標準タイプに従って建設されていたが^{文献56)}、1963 年にギプロテアトルによって「劇場の設計に関する指示書」(UPT-63) が開発され、1964 年にモスクワの娯楽・スポーツ施設中央研究所によって修正が行われ承認されていた^{文献57)}。これに基づいてアルマ・アタのドラマ劇場も設計が行われたが、プロジェクトの初期案では伝統的な装飾を施したパネル (写真 12) が提案された^{文献58)}。フライタワーもサーカスのドームや火力発電所の煙突と同様に劇場の機能的な特徴とされ^{文献59)}、装飾的なデザインが施されたが設計変更が行われ、実施案については「対照的な太陽光の条件では鉄筋コンクリートはその構造の特徴である強調された装飾的な表現力が産まれる (筆者記)」^{文献60)}と評価された。また外国の様々な劇場との比較分析が行われ F.L.ライトの劇場プロジェクトの考察は重要とされた^{文献61)}。



(写真 13) 国家図書館, 1970 年^{出典 12)}

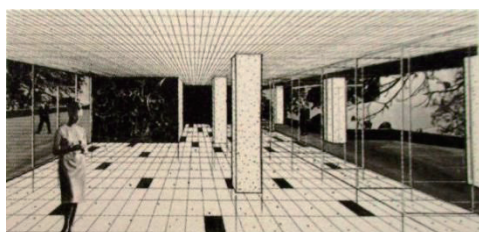


(図 1) 国家図書館 1970 年^{出典 13)}

1970 年にプシュキン・カザフスタン国家図書館(写真 13)が共産主義通りの南側終点とアバイ通りの交差点に V.イシェンコ, V.キムの設計によって建設された。共産主義通りの軸線上に配置され象徴性を帯びた配置計画であり,直方体の極めて単純なモダニズムの形態であるが,二つの中庭が設けられ内部空間への採光を図り,共産主義通りに向かって正面の北側ファサードがガラス張りになっており,内部の図書閲覧室と外部の自然環境との一体化が行われた(図 1)。



(図 2) コムソモール中央委員会^{出典 14)}

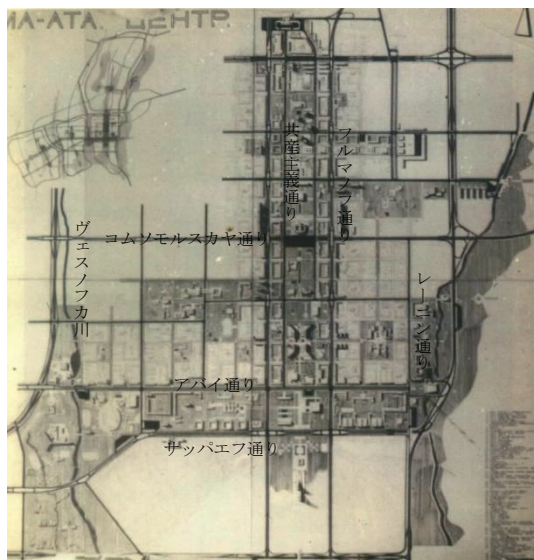


(図 3) ロビーの内部デザイン^{出典 15)}

1968 年から 70 年にかけてカザフスタンコムソモール中央委員会の建物(図 2)がコムソモルスカヤ通りに S.コスメルディ, V.アレの設計によって建設された。コムソモールとは共産党の青年組織であるが,1967 年 1 月に行われた CPSU 中央委員会会議にて偉大なる 10 月の社

会主義者革命 50 周年記念の準備に関する決定が行われ,若い世代にレーニン主義と共産主義の大義を教育し支援するために,コムソモール中央委員会に十月革命 50 周年に向けてコムソモールメンバーと若者による参加の手段を開発するよう提言が行われた^{文献 62)}。

1960 から 1963 年に行われたレンギプロゴールの一般計画は気候要因,歴史,インフラの特徴を考慮した提案を行っていないと批判され^{文献 63)},1967 年にアルマ・アタの市内中心地の全連合競技がソ連国家建設委員会傘下の国家土木建築委員会により開催され,モスクワの中央都市計画研究所,レニングラード都市計画研究所・レンギプロゴール,アルマ・アタギプロゴール,カズゴールストロイプロジェクトが参加し,アルマ・アタの政府庁舎の設計者でもあったモスクワの住宅・公共建築中央研究設計研究所所長の B.ルバネンコが委員長を務める審査委員会はレニングラード都市計画研究所・レンギプロゴールを一等案として選出しこの案を基礎とするよう推奨されたが,アルマ・アタギプロゴール,カズゴールストロイプロジェクトの案(図 4)にも興味深い提案があり,これらの提案も使用することが推奨された^{文献 64)}。1970 年には多くの変更が必要となり,モスクワ,レニングラード,キエフを含む各地の研究所の補助を受けながらアルマ・アタギプロゴールによって新たな一般計画が行われた^{文献 65)}。アルマ・アタギプロゴールは 1967 年にカズゴールストロイプロジェクトから 2 つのグループが分割され,市に属する設計機関として新たに設立された^{文献 66)}。



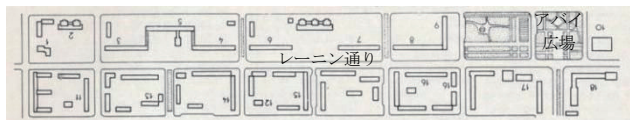
(図 4) 中心地開発計画案, 1967 年^{出典 16)}

前述の第 23 回 CPSU 会議においてレーニンの生誕 100 周年を記念するよう呼びかけられ,1968 年 7 月「ウラジーミル・イリイチ・レーニン生誕 100 周年記念準備」が CPSU 中央委員会によって決定され^{文献 67)},1968 年にカズゴールストロイプロジェクトの N.リピンスキー, T.バセノ

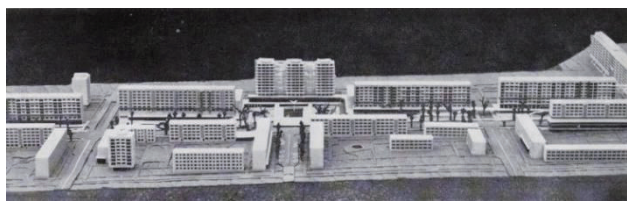
フ、V.ゲルシュベルグ、A.ペトロフ、A.ペトロワの設計によってレーニン生誕 100 周年を記念してレーニン通りの再建事業（図 5、写真 14）が行われた^{文献 68}。元来都市計画を行っていたアルマ・アタギプロゴールにプロジェクトが依頼されていたが、通りに沿った建物の配置計画において単調なレイアウトが地域的气候性を考慮していないと批判され、カズゴールストロイプロジェクトにプロジェクトが移行された^{文献 69}。レーニン通りに沿ってコムソモルスカヤ通りから南に向かって開発が行われ、9 階建て集合住宅が通りの東側に配置され、各集合住宅の間にはオープンスペースを設けるよう奥側に新たな建物が計画された。

1969 年 4 月にはカザフスタン共和国の建築の成果と現在の問題を検討する第 7 回カザフスタン建築家会議が開催され、レーニン生誕 100 周年の準備に関連した建築家の任務についても議論が行われた^{文献 70}。

また標準設計による住宅は多様なタイプを生産せず、仕上げ材の単調さは住宅地の灰色の無表情な建築を作り出し 20 年代の機能主義の最悪の例に逆戻りさせ、住民の正当な不満を引き起こした^{文献 71}。これを受け 1969 年 5 月 CPSU 中央委員会およびソ連閣僚理事会において「住宅及び土木建設の品質を改善するための措置について」が決議され^{文献 72}、都市開発における住宅建築への改善や美しい外壁の仕上げ材（レンガ、化粧コンクリート、ガラスタイル、セラミックタイル、アルミニウム、色ガラス、天然石、着色セメント、永久染料）を用い、都市中心部の建築アンサンブルにおいて適切な外観と色彩を適用する事が求められた^{文献 73}。



（図 5）レーニン通り開発計画^{出典 17}（図版左が北）



（写真 14）レーニン通り開発計画模型^{出典 18}

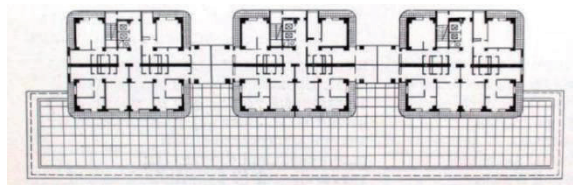
9 階建て集合住宅 1 階部分（写真 15）にはモザイク画が設けられ、梁で支えられたバルコニーが交互に配置され、9 階建て集合住宅の間に 12 階建て集合住宅（写真 16）が A.ペトロワ、G.ジャキポワ、N.チストクレトワらの設計によって 1970 年に建設された。手摺に装飾的なアルミや磁器タイルが適用され、三棟が鉄骨のブリッジによって連結されている。



（写真 15）9 階建て集合住宅、1970 年^{出典 19}



（写真 16）12 階建て集合住宅、1970 年^{出典 20}



（図 6）12 階建ての集合住宅平面図^{出典 21}



（写真 17）12 階建て集合住宅ディテール（筆者撮影）



（写真 18）9 階建て集合住宅（筆者撮影）

レーニン生誕 100 周年を記念して^{文献 74)}、レーニン宮殿（写真 19, 20）がアバイレーニン通りの T 字交差点に N.リピンスキー、L.ウホボトフ、A.ソコロフ、Yu.ラトゥシュニー、V.キム、V.アレの設計により 1968 年から 1970 年にかけて建設された。大衆の集会、会議、イベント、オペラ・バレエ、演劇、映画などの上演を目的としカザフスタン共産党・最高評議会が行われた^{文献 75)}。建物の外壁及び内壁にはマンガスタウ産の貝殻を含んだ石灰岩がアルマ・アタの建物にて初めて使用され^{文献 76)}、突き出した屋根の天井面には陽極酸化された黄金色のアルミの装飾が施された^{文献 77)}。

1960 年にカザフスタンを代表する詩人アバイの記念碑が交差点に建立されていたが、このレーニン宮殿の前にアバイ広場が記念碑と建築とのアンサンブルとして形成され、この広場を起点としてアバイ通りの開発が行われていった。



（写真 19）レーニン宮殿，1970 年（筆者撮影）



（写真 20）レーニン宮殿，1970 年（筆者撮影）



（図 7）レーニン宮殿 1967 年案^{出典 22)}

4. 第九次五カ年計画（1971-1975）前後の政治・建築界の状況

前述の 1969 年 5 月の CPSU 中央委員会の決定を受けて全ソ連建築家連合理事会第 9 回総会が 1970 年 1 月にモスクワで開催され、建築の質の向上、大きなガラス面における冬の熱損失や夏の不快な過熱を避ける必要、外

国の進歩的な文化人によって生み出された貴重なものは全て利用、資本主義建築の派手な形式主義的宣伝手法の無批判な借用に対する批判、新たな都市開発複合施設の構成に建築記念碑や民族文化を独創的に組み込む事などが謳われた^{文献 78)}。

1970 年 10 月にモスクワで開催された第 5 回全ソ連建築家会議にて「ソビエト建築の発展を成功させるには建築および建設科学の役割を大幅に増大させ、社会主義社会の発展に関するマルクス・レーニン主義の教えに基づいてソビエト建築の最も重要な問題をさらに発展させる必要がある。（中略）若い建築家の創造的な成長を促進し、異質なイデオロギーの発現と積極的に戦うこと。建築家はソビエト連邦の人々の文化遺産、進歩的な世界経験を巧みに利用、これら全てを真の革新と現代の最善の解決策のたゆまぬ探求と組み合わせなければならない。最も重要なイデオロギー的および教育的意義を持つ記念碑的なプロパガンダの計画の実施への注目を高めるために建築家と芸術家の間で創造的な協力を発展させることが必要（筆者訳）」^{文献 79)}と強調された。CPSU 中央委員会とソ連閣僚評議会の挨拶において「ソ連の建築家は、集合住宅や文化的建築の質、都市やその他の居住地の建築的外観に特別な注意を払い、無表現の建物を避け、様々な地域の自然や気候の特徴、進歩的な民族の伝統をより適切に考慮すること（筆者訳）」^{文献 80)}が求められた。

5. 第九次五カ年計画時（1971-1975）におけるアルマ・アタの都市計画と建設

1971 年に結婚宮殿（写真 21）が前述の 1967 年の一般計画に従ってアバイ通りとヴェスノフカ川の交差点北東側に M.メンディクロフ、A.レピックの設計によって建設された。結婚宮殿にて結婚式が行われるようになったのはフルシチョフによる反宗教キャンペーンによるものであった^{文献 81)}。建物の中央部分は吹抜けとなっており、内部やエントランス横にモザイクが施されているが、二層部分の外壁にジュラルミン製の伝統装飾的な日除けルーバーが設けられた^{文献 82)}。

1972 年に新たにサーカス（写真 22）がアバイ通りとヴェスノフカ川の交差点南西側に V.カーツェフ、I.スロノフの設計によって建設された。1966 年 9 月のカザフスタン閣僚評議会の決定によりトルクメニスタンのアシガバートに建設されたサーカスの設計に基づくよう指示されたが、建設予定の敷地形状の関係からソ連国家建設委員会は担当設計者による部分的な修正を許可した^{文献 83)}。

第 22 回 CPSU 会議にて「科学と文化の成果の相互交換、人々の理解と友情のため社会主義国家や他の諸国とのソ連の文化的関係を拡大することが必要である（筆者訳）」との認識から「国際文化交流の発展」が提言され^{文献 84)}、1972 年に外国友好の家（写真 23）がクルマンガ

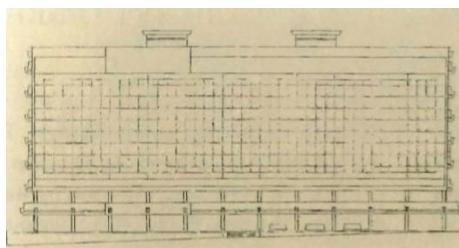
ジ通り沿いに R.セイダリン, L.ティムチェンコ, Kh.ヤク
プバエフの設計によって建設された。

1972 年に共産主義通りにアルマ・アタギプロゴールの
オフィス（写真 24）が A.コルジェンポ, M.カビルバエ
フの設計によって装飾的なルーバーが施された機能主義
的な建築が建設された。

1964 年 5 月 CPSU 中央委員会は労働者の共産主義教育
における博物館の重要な役割を考慮して「労働者の共産
主義教育における博物館の役割の増加」を決定しソ連時
代の部門の組織化などが決定され^{文献 85)}, 1969 年から 75
年にかけてカザフスタン国家美術館（写真 25）がサッパ
エフ通りとヴェスノフカ川の交差点南西側, サーカスの
南側に E.クズネツォワ, O.ナウモワ, B.ノビコフの設計
によって建設された。初期案では勾配が低い片面が立ち
上がったギザギザ状のトップライトであったが, 最終的
にはピラミッド型のトップライトが形成された^{文献 86)}。



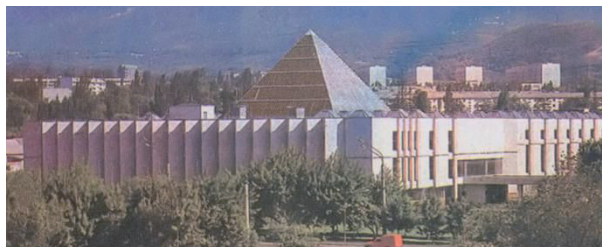
（写真 24）アルマ・アタギプロゴール, 1972 年^{出典 27)}



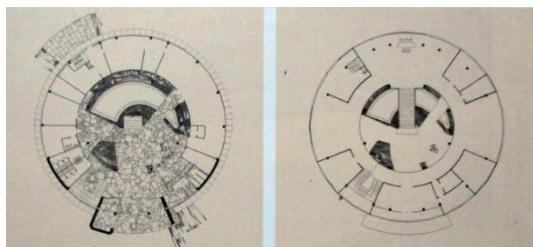
（図 9）アルマ・アタギプロゴール立面図^{出典 28)}



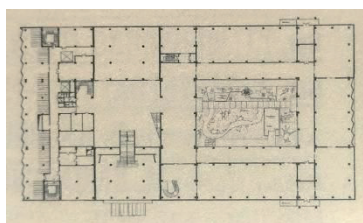
（写真 21）結婚宮殿, 1971 年^{出典 23)}



（写真 25）カザフスタン国家美術館, 1975 年^{出典 29)}



（図 8）一階, 二階平面図^{出典 24)}



（図 10）美術館二階平面図^{出典 30)}



（写真 22）サーカス, 1972 年^{出典 25)}



（写真 23）外国友好の家, 1972 年^{出典 26)}

6. まとめと今後の研究課題

6.1 まとめ

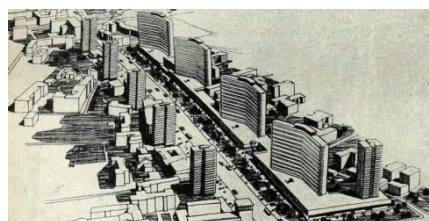
1962 年にキューバ危機が起こりフルシチョフによっ
て抽象芸術が非難され, 共産党によりイデオロギーの強
化が行われていき, 1963 年のソ連建築家組合理事会第 3
回総会で抽象主義への批判と社会主義リアリズムに基づ
く記念碑性が主張された。これを受けマゴメドフはミース
批判を強め, 外国の形式主義批判を分析しソ連の建築
にも導入することを促し, 全ソ連建築家連合理事会書記
の G.シェミヤキンは抽象主義, 気候性を無視したガラス
建築への批判を展開し, 共産主義イデオロギーの強化,
資本主義国家の建築をマルクス主義の観点から分析する
よう強く訴えた。

1964 年にブレジネフが書記長に就任しイデオロギー
の強化が謳われ, Yu.ヤラロフは 1965 年に建築雑誌でレ

レーニンの「二つの文化」の教義に基づいて新たに建築を構築するべきだと主張し、メキシコ大学の壁画や日本の建築、特に丹下健三の伝統と現代性を統合した建築を絶賛した。同年に書籍「美術史一般」の「20世紀の芸術」において外国の建築が紹介され、マゴメドフらによりミース批判としての建築傾向とライトの「有機的」な建築の展開を取り上げ、ブラジルや北欧、メキシコ、日本等の建築における保守的・革新的な特徴が概説され、同号に日本建築における伝統性と現代性の統合が世界中に影響を与えたとし、日本の伝統的な庭園を取り上げ建築と自然の融合は世界の現代建築において新たな解釈を生みだし、前川國男の東京文化会館が絶賛された。翌年の1965年に第4回全ソ連建築家会議が開催され、建築の質の向上、記念碑と都市のアンサンブルの重要性、社会主義リアリズムの必要性、資本主義国家の現代建築の批判的な習得が謳われた。

1966年から1970年の第八次五カ年計画中に建設されたレストラン「アルマ・アタ」やバスターミナル「サヤハット」など、形式主義的な建築が批判されたにも拘らず、水平連続窓などの機能主義的な様式であったが、レストランの内部空間にモザイク画が施され、「サヤハット」に関しては、建物上部にサンスクリーンが取り付けられ地域性が表現された。1965年頃専門機関のギプロアフトトランスのレニングラード支店によって機能主義的なバスターミナルの標準設計が開発されていたが^{文献 87)}、それらの一つが適用されたのではないかと考えられる。

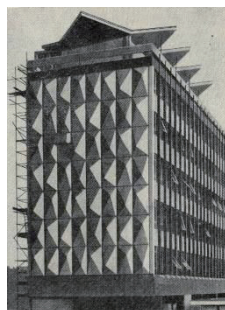
ホテル「アルマ・アタ」においては一階部分には民族伝承を表現したモザイクが施された。グラウディノフは「この建物に独特の柔らかさと表情が加味された(筆者訳)」^{文献 88)}と評したが、この湾曲した構成は1962年のモスクワのノーヴィ・アルバットの計画(図11)が参照されたのではないかと考えられる。キャンチレバーで突き出した建物本体にバルコニーのボリュームが纏わりつく構成にマレーヴィチのアルキテクトン(アルファ)の構成要素の影響が見受けられる。また日除けを兼ねたこのバルコニーは香川県庁舎のバルコニーが参照されたと考えられ、地域の気候性が考慮された。



(図11) ノーヴィ・アルバットの計画^{出典 31)}

共産党によりレーニンのイデオロギー強化のため十月革命50周年を記念するよう指示がなされ、ソ連建築家連

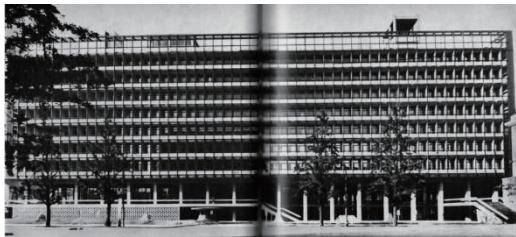
合理事会で建築デザインの向上とレーニン主義に基づいた芸術と記念碑の重要性が謳われ、十月革命50周年を記念してスポーツ宮殿や映画館「アルマン」が建設されたが、アルマ・アタの副主任建築家キム・ドセンが光や水の表現の重要性、コンクリートによる造形表現の重要性を主張したように、スポーツ宮殿では正面外壁を装飾的にデザインする事によって光と影を表現し、グラウディノフは「建物サイドの日除け(写真6)、正面ファサードの凸凹状の形態は光と影によって強調され芸術的表現を高めており、カザフスタンの建築の発展において重要な位置を占めている」^{文献 89)}としたが、この正面部分はソ連の建築1963年第9号にて「コンクリート建築部材の装飾処理」という論考でリバプール大学数学学部(写真26)が紹介されており、それが参照されたと考えられる。またサイドの日除けや前面部のスロープはル・コルビュジェのチャンディールガルの建築を参照したものと考えられる。映画館「アルマン」では十月革命50周年を祝うレリーフや凹凸のついた外壁、中庭を適用し地域性が表現され、外部に対し閉鎖的ではあるがモスクワの建築家ギンズブルグが1926年に提唱したソ連の社会主義建築における地域性としての建築が実現された。外壁に関して、ル・コルビュジェのアーメダバードの美術館の外壁の突起物をマルセイユのユニテ・ダイトシオンの屋上部分のように外壁に交互に取り付け、光と影が表現された。中庭正面の壁一面にも尖頭アーチ状の彫りが浅いレリーフ(写真9)が施されたことから、この壁はイスラム教の礼拝用の壁を表現したものではないかと考えられ、民族建築の要素が表現された。また1965年のニコラエワの「日本の芸術」にて日本の現代建築と自然の融合を称賛しており、中庭の植栽の直線的な構成は日本庭園を参照したものではないかと考えられ、ガラスを通した内部と外部の融合が行われた。



(写真26) リバプール大学数学学部^{出典 32)}

1963年に全ソ連建築家連合理事会書記シャムヤキンによりガラス建築による暑さ対策が主張され、1968年の共産党地域執行委員会の管理棟はガラスのカーテンウォールに日差しを避けるための垂直軸に回転するルーバーや水平ルーバーが取り付けられたが、1960年にイコンニ

コブにより建物を太陽熱から防ぐ手法としてブラジルの建築が推奨されたことから^{文献90)}、この垂直ルーバーはニーマイヤーによるリオデジャネイロの幼稚園（1937年）が参照されたのではないかと考えられる。また地上階のピロティ、二層目のテラスとピロティの上にボリュームが載る構成は、ヤラロフにより丹下健三の建築が絶賛されたことから旧東京都庁舎（写真27）の構成が参照されたと考えられる。



（写真27）旧東京都庁舎^{出典33)}

1969年に建設されたロシアドラマ劇場においてはモスクワの設計機関によって設計が行われ、外壁に伝統的なレリーフの装飾も検討されたが、おそらくコストの関係からガラス上部の外壁、フライトタワーともにリブ状のコンクリートパネルが適用されたのではないかと考えられるが、最終的には陰影に富んだ表現となった。

1970年には国家図書館とコムソモール中央委員会の建物が建設され、両棟も機能主義的な建築だが、図書館においてはガラスによる開放的な建築で、「АЛМА-АТА: Архитектура Советского Модернизма 1955-1991（アルマ・アタ：ソビエトモダニズムの建築 1955-1991）」（以下「A:A」）の著者は、このようなガラス張りの図書館は世界初の例^{文献91)}としたが、それは明らかに間違いであり、ガラス張りであった前川國男の神奈川県立図書館や丹下健三の津田塾大学図書館は建築雑誌でも既に紹介されており^{文献92)}、それらが参照されたものと考えられる。コムソモール中央委員会においては、通りから北側の地盤レベルが若干下がった場所に建設されたにも関わらず地上階へのアプローチ用にスロープが設けられ、地上階のピロティ、水平の連続窓、ブリーズソレイユ、屋上部分などコルビュジェの近代建築五原則が適用されている。また地上階ファサードにはモザイクパネル（図2）、1階のロビーにはステングラスが施されたが^{文献93)}、計画段階（図3）においてミースなどの西洋の形式主義的な建築が批判されたにも拘わらず、グリッド構造などにミースの影響が見受けられる。またテラスとピロティの構成、地上階のモザイクパネルの設置位置に丹下の旧東京都庁舎が参照されたと考えられる。

23回共産党大会においてレーニン生誕100周年を祝うよう決議が行われ、1968年にカズゴールストロイプロジェクトによってレーニン通りの再建計画が行われ、この配

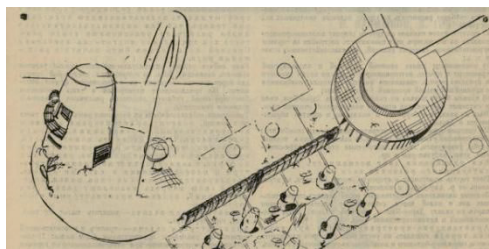
置計画は気候性を考慮したものであったが、記念碑性の創出のために1938年の人民健康委員会、国家農業省、食品産業委員会の建物で構成されたアンサンブルの構成が参照されたのではないかと考えられる。9階建ての集合住宅群や12階建ての集合住宅が建設されたが、9階建ての集合住宅については、前川國男の晴海高層アパートのようにバルコニーを強調し、香川県庁舎のように梁で支え、ル・コルビュジェのマルセイユのユニテ・ダビタシオンの南側外観のように交互に配置され、面的でグラフィカルな構成となっている。12階建ての集合住宅について、「A:A」の著者は、この建物は耐震壁を導入した構造（図6）のみならず、バルコニーのデザインから丹下健三の香川県庁舎へのオマージュとみなしたが^{文献94)}、低層部上に複数の高層棟が連結という構成は、1934年のモスクワの重工業人民委員会のヴェスニン兄弟やギンズブルグの構成主義のコンペ案を参照したと考えられるが、高層棟自体は四周を巡るバルコニーと梁の表現から「A:A」の著者の指摘通り香川県庁舎が参照されたと考えられる。この連結部分には鉄骨の梁が突き出しており（写真17）、香川県庁舎の特徴でもある木造表現としての突き出した梁が表現として参照されたと考えられる。同様にレーニン通り沿いの9階建て集合住宅の一つにも梁の表現が見られる（写真18）。また「A:A」の著者は耐震壁は香川県庁舎の構造のオマージュとしたが、コアシステムとは全く異なっており参照したとは考えられないが、1968年12月にソ連の建築家代表団が都市再建、耐震建築、都市交通の組織化を学ぶため訪日しており^{文献95)}、そこで耐震構造に関する知見を得たのではないかと考えられる。また建物の四隅が丸くなり表現が柔らかくなったが、カザフスタンの建築では初めての事例であり、ライトや戦後のル・コルビュジェの建築等の曲線による「有機」的表現が取り込まれた。

1970年のレーニン宮殿について、ヤラロフは「上方に反り曲がった屋根はカザフの遊牧民の伝統的な住居『ユルタ』を想起させ、そのまま建物内の天井へと連続していることは創造的な発見（筆者訳）」で^{文献96)}、「建築・芸術的な観点から民俗建築の発展的伝統とソ連建築の現代性を統合した金字塔（筆者訳）」とした^{文献97)}。グラウディノフは「カザフスタンのソ連建築の歴史において重要な位置を占め、共和国のアイデンティティーが解決された（筆者訳）」とし^{文献98)}、マリノフスカヤは屋根の輪郭はマンギスタウの伝統建築からの影響を指摘したが^{文献99)}、日本の同時代の建築の影響も指摘された^{文献100)}。カパノフは「設計者らはル・コルビュジェのチャンディール建築群を研究し、この大屋根は間違いなくチャンディール建築から着想を得た（筆者訳）」とした^{文献101)}。初期案（図7）においてはガラスのカーテンウォールで構成されており、1969年の外観の表現向上に関する

党の決定を受けて変更が行われたものと考えられる。ガラスを通して内部に貫通していく大屋根に関してはカパノフに指摘されている通りル・コルビュジェの建築が参照されたと考えられるが、前面の巨大な二つの柱も含めガラスを通じて貫通していく構成は、日本建築の影響が指摘されたように丹下の自邸の可能性も考えられる。サイド部分の階段室やスリットのデザイン（写真 20）を見ると同時に前川國男の東京文化会館の影響も考えられる。また階段と連続する一階部分のテラスや手摺の意匠は京都会館を参照したものと考えられる。

第九次五カ年計画において、1970 年 1 月に開催された全ソ連建築家連合理事会第 9 回総会にて、表現力豊かな建築アンサンブルの創出、ガラス張りの建築に対してルーバーなどの設置の必要性、外国の建築の無批判な使用に対する非難と進歩的な文化の摂取等が謳われ、1970 年 10 月に開催された第 5 回全ソ連建築家連合会議においてマルクス・レーニン主義に基づいた建築の発展、建築家と芸術家の共同によるイデオロギーのプロパガンダとしての建築記念碑の必要性などが謳われた。

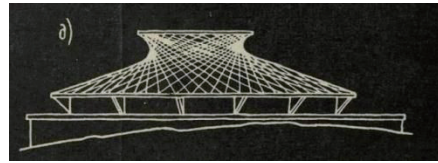
1971 年の結婚宮殿では、マリノフスカヤは「伝統住居であるユルタと結婚指輪の形象的意味合いから結婚式場の機能が決定されている（筆者訳）」^{文献 102}）としたが、三種類のシリンダーで構成され、平面の構成（図 8）においても構成主義的な建築であり、1931 年の V.カルムイコフによるトルクメニスタンのチャージュイのプロジェクト（図 12）等が中央アジアの伝統を考慮した構成主義建築として参照されたのではないかと考えられ、地域主義的な構成主義建築の構成に伝統的な装飾をモチーフとした日除けルーバーとモザイクが適用された。構成主義的な要素が用いられたのは計画が 1966 年に始まったためだと考えられる。



（図 12）チャージュイのプロジェクト ^{出典 34}

V.カーツェフによる 1972 年のサーカスについて、グラウディノフは「ドーム状の形状は共和国の伝統的な建築を連想させ、ドームで構成された円形ボリュームは現代的な構成であると同時に国家の芸術文化との連想は否定できない（筆者訳）」^{文献 103}）としてユルタとの連想を試しみ、カパノフは「屋根の形態はブラジリアの大聖堂から着想を得ているが、マンギスタウ霊廟の尖ったドームを連想させる（筆者訳）」と述べた^{文献 104}。しかしどのサー

カスも円型のドーム構造であり、この屋根の形状や双曲線のラインは民族性の表現ではなく、1960 年のアメリカのセントルイスのプラネタリウム（図 13）が参照されたと考えられる。また水平の日除けルーバーやバルコニーの形状はル・コルビュジェの影響と考えられる。



（図 13）セントルイスのプラネタリウム ^{出典 35}

1972 年の外国友好の家では、マリノフスカヤは前述のレーニン宮殿と同様に「マンギスタウの伝統建築をさらに発展させた（筆者訳）」^{文献 105}）としたが、60 年代にロシア共和国にて建設された劇場^{文献 106}）と多くの形態的類似点が見受けられる。サモイロフは「前川國男の京都会館をさらに発展させた建築（筆者訳）」^{文献 107}）とし、「A:A」の著者は前面の柱梁のフレームを、ピーター・アイゼンマンの House III（1971 年）やチャールズ・ムーアのクレスゲ・カレッジ（1971 年）における初期脱構築のフレームと同様のものとしたが^{文献 108}）、全く異なるものであり、サモイロフが指摘している通り京都会館の柱梁の構造を取り入れ、前川國男の東京文化会館のようにフレームをガラス面から分離させて屋根と柱の関係を強調したのではないかと考えられる。同時にそのロシアの劇場の屋根の形状と柱の構成も京都会館を参照したと考えられる。

アルマ・アタギプロゴールのオフィスにおいて、コルジェンボは「A:A」の著者との 2017 年 3 月のインタビューで「この建物は脚で立つテレビの形で、ガラス面はテレビ画面であり、日除けスクリーンの円は画面上のピクセル（筆者訳）」^{文献 109}）と説明したが、ピロティにテラス、ピロティ上にマッシブなボリュームの構成（図 9）は丹下の旧東京都庁舎と同様の構成で、円型が組み合わされた構成の日除けルーバーはミノル・ヤマサキのレイノルズ・メタル本社ビルと全く同様であり直接参照されたと考えられる。また二階のテラスの手摺下部分の梁の表現は旧東京都庁舎裏側部分の二階の梁が参照されている。

1975 年に建設された国立美術館について、マリノフスカヤはトップライト形式のアトリウムを伝統的な空間構成としたが^{文献 110}）、「ソ連の装飾芸術」1972 年第 10 号の N.グリヤニツキーによる論考「日本の現代建築における伝統とイメージ」にて西洋美術館が独自の分析で高く評価されたことや^{文献 111}）、1972 年頃に美術館建設における外国の経験のレビューが出版されたが^{文献 112}）、おそらくその書籍で紹介されていたのではないかと考えられ、設計変更の際にピラミッド型のトップライトとアトリウムの構成は日本の西洋美術館（図 14）が参照されたのではな

いかと考えられる。1964年に建設された児童臨床病院にて四角錐のガラスのトップライトが適用されたが^{文献113}、これは形状としてはアルマ・アタにおいて初めてのピラミッド型のトップライトであり、記号論的な観点からも最初のポストモダン建築と言え、1986年の磯崎新のロスアンジェルス現代美術館などと比較してかなり早い時期でのピラミッド形態の適用と言える。またトップライト下のアトリウム内の回廊の展示室はライトのグッゲンハイム美術館が参照され、平面計画（図10）において中庭を配しガラスを通して採光を図っており、「A:A」の著者はユネスコ本部のイサム・ノグチによる日本庭園に似ているとしたが^{文献114}、前述のようにガラスを通した日本建築と庭園が参照されたものと考えられる。またエントランス底に関しては、1967年の計画時点から直方体のモノリス状であり構成主義の要素が残されている。



（図14）西洋美術館とグッゲンハイムの断面図^{出典36}

このように西洋の抽象主義・形式的な機能主義が否定され、イデオロギーの強化に基づき、アルマ・アタの建築において第八次五カ年計画中は、機能主義的建築は建設されたが、構成主義的建築と共に民俗性を表現したモザイクパネルによる建築の統合、機能主義的建築に地域性を考慮したル・コルビュジェのブリーズ・ソレイユやニーマイヤーのルーバー、中庭の適用、コンクリートによる造形性の向上や光と影の表現、丹下健三や前川國男等の建築の構成・要素や中庭における日本の伝統的な庭園の導入などが行われた。第九次五カ年計画においては地域主義や進歩的な民族主義が謳われたが、外装材に石灰岩や着色されたアルミパネル等が適用され、外観の表現が向上され造形力が豊かになり、地場産の石材により地域性が獲得されていったが、機能的・構成主義的建築と伝統的な文様を表現したルーバーやモザイクは表層的な表現にとどまり、日本建築やル・コルビュジェ、ライト等の外国の建築の参照は部分的であり、旧東京都庁舎の構成その物の適用も見られ、1965年にヤラロフが提唱した「建築における民族と国際」におけるレーニンの教義「二つの文化」は、外国の建築の批判的な摂取が謳われたが、ヤラロフが称賛した丹下の香川県庁舎のような伝統と現代性の統合は行われず、寧ろ直接的な引用による折衷的な表現にとどまった。

6.2 今後の研究課題

ヤラロフによるレーニンの教義「二つの文化」がカザ

フスタンの建築においてどのように展開されていったのか、一次資料の図面等を基に更なる分析が必要である。

フルシチョフによる抽象主義への批判後マゴメドフによりミース派の建築への批判が行われ、G.シェミヤキンに資本主義国家の建築におけるマルクス主義的分析の必要性が謳われ、日本やメキシコ、ル・コルビュジェやニーマイヤー、アアルトなどの建築の分析と紹介が行われていったが、マルクス主義的な分析がどのように行われたのか。例えばN.ニコラエフによる「日本の芸術」では日本共産党や日本プロレタリア美術連盟等についても記述されており、メキシコは当時共産国家でありニーマイヤーは共産主義者であったことなど、各国と各建築家におけるマルクス主義との関連性の分析も必要である。

ヤラロフは日本の建築やメキシコの建築が民族性と現代性を統合した例として挙げたが、この理由の一つにフランク・ロイド・ライトが古代メキシコと日本の伝統的な特徴を取り入れているとされたことから^{文献115}、ソ連では「有機建築」として評価が極めて高かったライトの影響もあったのではないかと考えられる。香川県庁舎が「コンクリートによる木造の表現」であったことから、梁の表現は単なる形態の模倣ではなく有機的建築としてのメタファーであったのではないかと考えられる。またスコピエ計画や東京オリンピック、大阪万博もソ連の建築界にどのような影響を与えたのか。

フルシチョフ時代からメキシコのシケイロスやリベラの芸術は推奨されており、メキシコ大学の影響を受けて建築の内部にモザイクやレリーフが用いられたが、同時に前川國男の東京文化会館や丹下健三の建築の影響もあったのではないかと考えられる。

1975年に建設された美術館のトップライトにおいて四角錐のピラミッドに変更されたが、1963年のCPSU中央委員会による「党のイデオロギー活動の当面の課題について」の決定を受け、「ソ連の建築」1964年第6号に「ソビエト建築のイデオロギー的課題」という論考が投稿されたが、その中で「エジプトのピラミッドは記念碑のイデオロギー的・芸術的内容の不可欠な部分」^{文献116}と定義されたことが大きく関わっているのではないかと考えられる。また1970年のV.マルクゾンによる「建築言語の発展法則と意味論において」の記号論に関する論考での「ピラミッドは絶対的な平和と永遠を表す独特なテクニクスのイメージ（筆者訳）」^{文献117}、同じく1970年のA.アイコンニコフによる論考「建築とイデオロギー」で、「芸術的で表現豊かな解決策の創出には、構成的な形式を芸術的な形式に変換し、構造要素を意味論的な記号に変換する原則を習得する必要がある。（中略）建築の形式によって生み出される表象の形成は社会システムの中で人々が獲得する集合的な経験によっても決定され、人々の長期記憶に保存される安定したイメージの蓄積に

よっても決定される（筆者訳）」^{文献118)}とした。これは明らかにヴェンチューリとアルド・ロッシの影響であるが^{注2)}、これらの論考も同様にポストモダニズムにおけるシンボリズムとしてのピラミッドへの形態変更に影響を与えたと考えられるが更なる検証が必要である。

参考文献

- 1) 諸喜田真：カザフスタンのアルマトイ市の第六次・七カ年計画におけるソビエト政権下の都市計画・建築様式に関する研究動向と課題：フルシチョフ政権時代のソビエト・カザフスタンの一般建築史，九州大学大学院人間環境学研究院紀要第47号，pp. 53-54, 2025年1月
- 2) Малиновская Е. Г. : Памятник архитектуры советского модернизма: дворец им. В.И. Ленина (Алматы), Культура и цивилизация. 2017. Том 7. № 4А, ANALITIKA RODIS, p.438, 2017
- 3) Яралов Ю. и др. (ред.) : Архитектурное Творчество СССР Выпуск 5 (ソ連の建築的創造性 第5号) , Стройиздат, p.22, 1979
- 4) Самойлов К. И. : Архитектура Казахстана XX века (Развитие архитектурно-художественных форм) (20世紀のカザフスタンの建築 (建築と芸術形式の発展)) , М-Ари, pp.625-626, 2004
- 5) 松戸清裕：ソ連史，筑摩書房, p.161, 2011年12月
- 6) Коммунистическая партия Советского Союза : Коммунистическая партия Советского Союза в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК (1898-1986) ТОМ ДЕСЯТЫЙ (ソ連共産党中央委員会の大会, 会議, プレナムの決議と決定 (1898-1986) 第10巻) , Политиздат, pp.352-353, 1986
- 7) Архитектура СССР 1964 №.1 (ソ連の建築 1964 No.1) , Стройиздат, p.2, 1964
- 8) Ibid., pp.2-3
- 9) Архитектура СССР 1963 №.7, Стройиздат, pp.3-4, 1963
- 10) Ibid., pp.50-52
- 11) Ibid., p.52
- 12) Архитектура СССР 1963 №.8, Стройиздат, p.3, 1963
- 13) Ibid., p.3
- 14) Ibid., p.4
- 15) Ibid., p.5
- 16) Алессандра Латур : Москва 1890-2000 : Путеводитель по современной архитектуре (モスクワ 1890—2000 年: 現代建築ガイド) , Искусство - XXI век, p.97, 2007
- 17) Сборник Союза архитекторов СССР Советская архитектура №17 (ソ連建築家連合コレクション ソビエト建築 No.17) , Издательство литературы по строительству, pp.97-99, 1965
- 18) Ibid., pp.108-109
- 19) Ibid., pp.132-142
- 20) Колпинский Ю. Д., Веймарн Б. В. и др. (ред.) : Всеобщая история искусств. Т.6 - кн. 1. Искусство 20 века (美術全般の歴史 第6巻, 第1冊, 20世紀の芸術), Государственное издательство «Искусство», pp.128-139, Москва, 1965
- 21) Ibid., pp.152-160
- 22) Ibid., p.212
- 23) Ibid., pp.220-223
- 24) Ibid., pp.250-262
- 25) Ibid., pp.304-306
- 26) Ibid., pp.338-349
- 27) Ibid., pp.387-402
- 28) Ibid., p.53
- 29) Ibid., pp.53-54
- 30) Ibid., pp.57-58
- 31) Ibid., p.421
- 32) Ibid., p.422
- 33) Ibid., p.422
- 34) Архитектура СССР 1965 №.12, Стройиздат, p.4, 1965
- 35) Архитектура СССР 1966 №.1, Стройиздат, p.1, 1966
- 36) Ibid., p.2
- 37) Ibid., pp.2-3
- 38) Ibid., p.3
- 39) Коммунистическая партия Советского Союза : op.cit., ТОМ ОДИННАДЦАТЫЙ (第11巻) , p.27
- 40) Архитектура СССР 1966 №.4, Стройиздат, pp.1-6, 1966
- 41) Сборник Союза архитекторов СССР Советская архитектура №17, op.cit., pp.9-10
- 42) Коммунистическая партия Советского Союза : op.cit., ТОМ ДЕВЯТЫЙ (第9巻) , p.414
- 43) Броницкая А., Малинин Н. : АЛМА-АТА : Архитектура Советского Модернизма 1955-1991, Музей современного искусства «Гараж», p.62, 2018
- 44) Архитектура СССР 1972 №.12, Стройиздат, p.35, 1972
- 45) Архитектура СССР 1968 №.7, Стройиздат, p.64, 1968
- 46) Коммунистическая партия Советского Союза : op.cit., ТОМ ОДИННАДЦАТЫЙ (第11巻) , p.57
- 47) Глаудинов Б. : Архитектура Советского Казахстана (ソビエト・カザフスタンの建築) , Стройиздат, p.85, 1974
- 48) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p. 71
- 49) Басенов Т. К., Гершберг В. М., Гребень В. Б. и др : Градостроительство Казахстана (カザフスタンの都市計画) , Алма-Ата Казахстан, p.8, 1973
- 50) Глаудинов Б. : op.cit., p.87
- 51) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.76

- 52) Коммунистическая партия Советского Союза : op.cit., ТОМ ДЕСЯТЫЙ, p.177
- 53) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г.-Рюнтю, Проскурин В. Н. : СВОД памятников истории и культуры г.Алматы (年代記 アルマトイの歴史・文化的記念碑) , Казак энциклопедиясы, p.304, 2006
- 54) Архитектура СССР 1966 №.12, Стройиздат, p.9, 1966
- 55) Ibid., p.10
- 56) Хрипунов Ю. Д., Гнедовский Ю. П., Гнедовски С. В. и др : Архитектура советского театра (ソビエト劇場の建築) , Стройиздат, p.196, 1986
- 57) Архитектура СССР 1966 №.12, Стройиздат, p.14, 1966
- 58) Хрипунов Ю. Д., Гнедовский Ю. П., Гнедовски С. В. и др : op.cit., p.262
- 59) Архитектура СССР 1966 №.12, Стройиздат, p.14, 1966
- 60) Архитектура СССР 1968 №.9, Стройиздат, p.38, 1968
- 61) Архитектура СССР 1966 №.12, Стройиздат, pp.27-28, 1966
- 62) Коммунистическая партия Советского Союза : op.cit., ТОМ ОДИННАДЦАТЫЙ (第 11 卷) , p.137
- 63) Ibid., p.165
- 64) Архитектура СССР 1969 №.7, Стройиздат, p.61, 1969
- 65) Капанов А. К., Баймагамбетов С. К. : Алматы: архитектура и градостроительство (アルマトイ : 建築と都市計画) , DIDAR Publishing Co., p.145, 1998
- 66) Бейсембай М., Мустафина С. Г. : Ратушный Ю. Г. (Воспоминания и эссе об архитекторе Ю. Г. Ратушном) (ラトウシュニー・Yu. G. (建築家 Yu.G.ラトウシュニーに関する回想録とエッセイ) , Издательство «KAZGOR Басбакан », p.4, 1997
- 67) Коммунистическая партия Советского Союза : op.cit., ТОМ ОДИННАДЦАТЫЙ, p.333
- 68) Архитектура СССР 1969 №.4, Стройиздат, p.13, 1969
- 69) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.107
- 70) Архитектура СССР 1969 №.7, Стройиздат, p.62, 1969
- 71) Былинкин Н. П., Журавлев А. М. и др : Современная советская архитектура 1955—1980 гг. (ソビエト現代建築 1955—1980) , Стройиздат, p.90, 1985
- 72) Баранов Н.В. : Всеобщая история архитектуры. В 12 томах. Архитектура СССР. Том 12, первая книга (建築の一般的な歴史 全 12 卷 ソ連の建築第 12 冊 第 1 冊) , Стройиздат, p.600, 1975
- 73) Собрание постановлений правительства СССР за 1969 г. № 1-26 (1969 年のソ連政府決議集 No. 1-26) , Юридическая литература, p.432, 1969
- 74) Ауэзов Е. К., Чулакова Н. П. : Алматы. Архитектурные хроники (история создания уникальных зданий города) (アルマトイ. 建築クロニクル (都市のユニークな建物の創造の歴史) , Алматы, p.95, 2010
- 75) Курбатов В. В. : Советская архитектура (ソビエト建築) , Просвещение, p.188, 1988
- 76) Ауэзов Е. К., Чулакова Н. П. : op.cit., p.96
- 77) Глаудинов Б. А., Сейдалинов М. Г., Карпыков А.С. : Архитектура Советского Казахстана (ソビエト・カザフスタンの建築) , Стройиздат, p.222, April, 1987
- 78) Архитектура СССР 1970 №.5, Стройиздат, pp.1-3, 1970
- 79) Архитектура СССР 1970 №.11, Стройиздат, p.2, 1970
- 80) Архитектура СССР 1975 №.11, Стройиздат, p.19, 1975
- 81) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., pp.126-127
- 82) Глаудинов Б. А., Сейдалинов М. Г., Карпыков А.С. : op.cit., p.242
- 83) Ауэзов Е. К., Чулакова Н. П. : op.cit., p.121
- 84) Коммунистическая партия Советского Союза : op.cit., ТОМ ДЕСЯТЫЙ, p.178
- 85) Ibid., pp.416-417
- 86) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.170
- 87) Архитектура СССР 1965 №.3, Стройиздат, p.32, 1965
- 88) Глаудинов Б. : op.cit., p.76
- 89) Глаудинов Бекримжан : Развитие Архитектуры Казахстана в Эпоху Социализма (社会主義時代のカザフスタンにおける建築の発展) , Казахской головной архитектурно-строительной академии, p.262, 2019
- 90) Архитектура СССР 1960 №.9, Стройиздат, p.4, 1960
- 91) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.90
- 92) Архитектура СССР 1960 №.10, Стройиздат, pp.68-70, 1960
- 93) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г.-Рюнтю, Проскурин В. Н. : op.cit., p.218
- 94) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.118
- 95) Архитектура СССР 1969 №.4, Стройиздат, p.64, 1969
- 96) Архитектура СССР 1972 №.12, Стройиздат, p.53, 1972
- 97) Яралов Ю. и др. (ред.) : Архитектурное Творчество СССР Выпуск 2 (第 2 号) , Стройиздат, p.182, 1974
- 98) Глаудинов Б. А., Сейдалинов М. Г., Карпыков А.С. : Ibid., p.225
- 99) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г.-Рюнтю, Проскурин В. Н. : op.cit., p.179
- 100) Малиновская Е. Г. : op.cit., p.435
- 101) Капанов А. К., Баймагамбетов С. К. : Архитектура Казахстана том 10 (カザフスタンの建築 第 10 卷) , Онер, p.95, 2013
- 102) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г.-Рюнтю, Проскурин В. Н. : op.cit., p.176
- 103) Глаудинов Б. : op.cit., p.90
- 104) Капанов А. К., Баймагамбетов С. К. : op.cit., p.94,

2013

- 105) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г.-Рюнтю, Проскурин В. Н. : op.cit., p.249
- 106) Хрипунов Ю. Д., Гнедовский Ю. П., Гнедовски С. В. и др : op.cit., pp.246-255
- 107) Самойлов К. И. : op.cit., p.447
- 108) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.152
- 109) Ibid., p.148
- 110) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г.-Рюнтю, Проскурин В. Н. : op.cit., p.290
- 111) Декоративное искусство СССР 1972. № 10 (ソ連の装飾芸術 1980 No.8) , Советский художник, p.31, 1972
- 112) Архитектура СССР 1972 №.7, Стройиздат, p.43, 1972
- 113) 諸喜田真 : op.cit., p.65
- 114) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.167
- 115) Архитектура СССР 1961 №.5, Стройиздат, p.56, 1961
- 116) Архитектура СССР 1964 №.6, Стройиздат, p.2, 1964
- 117) Архитектура СССР 1970 №.1, Стройиздат, p.51, 1970
- 118) Архитектура СССР 1970 №.10, Стройиздат, p.29, 1970

写真・図版出版

- 1) Басенов Т. К., Гершберг В. Ш. : Градостроительство Казахстана (カザフスタンの都市計画) , Издательство «Казахстан», p.82, 1973
- 2) Ibid., p.85
- 3) Татыгулов А. Ш., Ералиев Т. Е. : Архитектор Рипинский Н. И. К столетию со дня рождения (建築家 N.I.リピンスキー 生誕 100 周年について) , Издательство «Басбакан» Проектная академия «KAZGOR», p.57, 2006
- 4) Архитектура СССР 1967 №.1, Стройиздат, p.62, 1967
- 5) Архитектура СССР 1968 №.9, Стройиздат, p.36, 1968
- 6) Архитектура СССР 1972 №.12, Стройиздат, p.34, 1972
- 7) Басенов Т. К., Гершберг В. Ш. : op.cit., p.81
- 8) Ibid., p.82
- 9) Глаудинов Б. А., Сейдалинов М. Г., Карпыков А. С. : Архитектура Советского Казахстана, Стройиздат, p.278, April, 1987
- 10) Архитектура СССР 1972 №.12, Стройиздат, p.31, 1972
- 11) Архитектура СССР 1966 №.12, Стройиздат, p.13, 1966
- 12) Басенов Т. К., Гершберг В. Ш. : op.cit., p.78
- 13) KAZGOR. Проекты (カズゴール・プロジェクト) , Издательство «Basbaqan», p.30, 2019
- 14) Глаудинов Бекримжан : Развитие архитектуры Казахстана в эпоху социализма, Казахской головной архитектурно-строительной академии, p.306, 2019
- 15) Броницкая А., Малинин Н. : АЛМА-АТА :

Архитектура Советского Модернизма 1955-1991, Музей современного искусства «Гараж», p.167, 2018

- 16) Татыгулов А. Ш., Ералиев Т. Е. : op.cit., p.22
- 17) Архитектура СССР 1969 №.4, Стройиздат, p.13, 1969
- 18) Архитектура СССР 1970 №.5, Стройиздат, p.9, 1970
- 19) Архитектура СССР 1972 №.12, Стройиздат, p.31, 1972
- 20) Басенов Т. К., Гершберг В. Ш. : op.cit., p.39
- 21) Глаудинов Б. А., Сейдалинов М. Г., Карпыков А. С. : op.cit., p.166
- 22) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.103
- 23) Архитектурное Творчество СССР Выпуск 2, Стройиздат, p.189, 1974
- 24) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.127
- 25) Декоративное искусство СССР 1980. № 8, Советский художник, p.7, 1980
- 26) Самойлов К. И. : Архитектура Казахстана XX века (Развитие архитектурно-художественных форм), М-Ари, p.448, 2004
- 27) Капанов А. К., Баймагамбетов С. К. : Алматы: архитектура и градостроительство, DIDAR Publishing Co., p.145, 1998
- 28) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.149
- 29) Нурпеисов М. М., Малиновская Е. Г.-Рюнтю, Проскурин В. Н. : СВОД памятников истории и культуры г.Алматы, Казак энциклопедиясы, p.290, 2006
- 30) Броницкая А., Малинин Н. : op.cit., p.166
- 31) Архитектура СССР 1964 №.8, Стройиздат, p.6, 1964
- 32) Архитектура СССР 1963 №.9, Стройиздат, p.53, 1963
- 33) Культерман У. : Кензо Танге. 1949-1969. Архитектура и градостроительство (丹下健三 1949-1969 建築と都市計画) , Стройиздат, pp.46-47, 1978
- 34) Советская архитектура. 1931. № 1-2 (ソビエト建築 1931.No. 1-2) , Государственным научно-техническим издательством, p.39, 1931
- 35) Архитектура СССР 1960 №.9, Стройиздат, p.44, 1960
- 36) Рошин И. Е. (ред) : Архитектурное проектирование общественных зданий и сооружений (公共の建物と構造物の建築設計) , Стройиздат, p.269, 1985

注

- 1) 筆者インタビュー, 2017 年 4 月 27 日
- 2) イコンニコフとロッシ, ヴェンチューリとの関係は 2024 年 5 月に発表された Jeong, D の論文「Italo-Soviet Architectural Exchanges and Postmodernism under Late Socialism」に詳しい。 <https://journal.eahn.org/article/id/8521/>

参考文献, 写真・図版は二次資料からの転載